

●特集

受験生をふりまわすな!

入試大混乱



対談

迷走する大学改革
今必要なのは、撤退と決算だ

竹内洋 30
佐藤郁哉

エセ演繹型思考による政策決定を駁す
教育改革神話を解体する

荻谷剛彦 42

頓挫した韓国、多面的な中国、長期的選抜のデンマーク
各国も試行錯誤「話す」「書く」英語試験事情

天野一哉 55

それでも入試改革が必要な理由

鈴木寛 60

現場を惑わす

南風原朝和 69

曖昧な改変は止めよ

今井むつみ 78

激突

推進派、反対派に問う

受験生保護の大原則に従った入試制度改革を
英語民間試験利用を見送った東北大学の入試設計思想

倉元直樹 80



対談

二大受験マンガ『ドラゴン桜』vs.『二月の勝者』
国が投資すべきはトップ層か
中間層か恵まれない層か?

三田紀房 88
高瀬志帆
司会 おおたとしまさ

対談

人生を賭けた高校生に大迷惑
教育を政争の具にするな!

池上彰 100
佐藤優

私と受験

制度が変わっても、「マドンナ古文」が貫いてきたもの
小説家への夢、インドとの因縁、呪われた執拗さは入試で養われた
雑書ノートの頃

荻野文子 108
石井遊佳 112
千葉雅也 116

時評
2020

入試改革、何を見直すか?
大型経済対策の狙いは何か
「館」が象徴する安倍長期政権と野党の存在感

砂原庸介 22
土居丈朗 24
東浩紀 26

田原総一郎が広井教授に迫る
経済優先、都会志向はもう古い!
昭和的価値観を捨て、人口減少社会を乗り切れ

広井良典 150
田原総一郎

追悼 中曽根康弘元首相

私心なき勉強家 盟友との六十余年

渡邊恒雄 122
服部龍二 130



それでも入試改革が必要な理由

東京大学大学院教授
慶應義塾大学教授

鈴木寛

大学入試改革の二本柱である、英語の民間試験導入と、国語・数学の記述式問題導入が延期されることとなった。改革を推進してきた鈴木寛・元文部科学副大臣と、それに反対してきた南風原朝和・東京大学名誉教授に、今井むつみ・慶應義塾大学教授が見解を聞いた——。

学びを変えるために、入試を変える
今井 なぜ今、大学入試改革が必要



すずきかん
1964年兵庫県生まれ。東京大学法学部卒業後、86年通商産業省に入省。2001年参議院議員初当選。09年より2年間、文部科学副大臣を務める。14年10月文部科学省参与、15年2月から18年10月まで文部科学大臣補佐官を4期務める。アクティブ・ラーニングの導入を推進。20年度から始まる新学習指導要領の改訂、40年ぶりの大学入学制度改革に尽力した。著書に「熟議」で日本の教育を変える」、編著に「クリエイティブ・ラーニング」など。

なのか、その理由を改めてお聞かせください。

鈴木 思考力・判断力・表現力の向上のためです。学校教育において、思考力・判断力・表現力等の育成や言語活動の充実、国語力の向上の重要性といったことが、学校教育法や学習指導要領で謳われてから一〇年以上が経ちます。高校で言えば、平成二十一年の「高等学校学習指導要領」で、言語活動の充実、国語力の向上はすべての教科の思考力・判断力・表現力のベースであると明記されていますし、教科書もこれに沿ったかたちで作られています。

私は高校や中学校の現場に視察に行きますが、この学習指導要領に基づいた素晴らしい授業を行う熱心な教員や学校も出てきている。しかし、それが大多数にならないもどかしさも感じてきました。中学校の授業は

聞き手◎今井むつみ 慶應義塾大学教授



いまいむつみ
1989年慶應義塾大学大学院博士課程単位取得退学。94年米ノースウェスタン大学心理学部でPh.D.取得。専門は認知科学、言語心理学、教育心理学。著書に「ことばと思考」「言語と身体性」(編著)、「学びとは何か」など。

学習指導要領の改訂でかなり変わってきたものの、高校はそれほど変わりません。例えば、平成十一年の学習指導要領で英語におけるコミュニケーションの重要性が指摘され、平成二十一年には英語の四技能(読む、聞く、話す、書く)を明記しました。その結果、中学校では八割の学校で

四技能の授業が行われています。しかし、高校では約三割に過ぎません。英語がしゃべれる教師が約七割いるにもかかわらずです。

なぜ高校では学習指導要領どおりにならないかというと、現在のマークシート型の大学入試によって、高校の学びが知識の暗記中心に歪められているからです。入試が変わらなければ、生徒の学びは変わらない。現に、国立大学二次試験や早稲田大学の入試に長文の記述・論述式の出題が発表されて、受験勉強も変わってきています。

学校教員は誤解しがちですが、学校の授業は、高校生の学びの重要な一部にすぎません。家庭学習や塾などの各自が学校外で行う学習も、学習の大きな要素。それらの学びすべてに影響を与えているのが、大学入試です。学習指導要領だけでは、国

語・英語で言えば、年間授業約百数十時間の一部しか変わらないのです。つまり、高校生の学習のありようにトータルに影響を与えているのは、学習指導要領よりも大学入試です。逆に、入試改革に反対する方にお聞きしたい。入試以上に高校生の学習に影響を与えているものはあるでしょうか。あれば教えてほしいです。現在の入試が、高校生の学びや、高校の授業までも暗記偏重に歪めていることは事実で、それを正そうとしてきました。

学校教育法にも学習指導要領にも、思考力・判断力・表現力の重要性、言語活動の充実が書いてあるのに、一〇年以上も放置されてきた。記述式のない大学を受験する高校生は、家庭学習や塾で、それに力を入れますか？ SNSが普及する中で、文章を書くことのできない生徒が増え

思考力を持つ一部の人がマニュアルを作り、指示し、他の人たちはフォローとしてそのマニュアルを正確に高速に再現すればよかった。しかし、情報社会が進展していく今後の社会では、言われたことを高速に正確にやる仕事は、デジタルテクノロジーによって置き換えられていきます。知識は暗記せずとも検索できます。AIの普及によって、それは急速に加速する。二〇四〇年には人工知能が人間の知能を超える「シンギュラリティ（技術的特異点）」も予想されています。その真偽をめぐる細かい議論はさておき、その方向に向かうことは間違いありません。

現在の小・中・高校生の多くは二一〇〇年を超えて生きるでしょう。シンギュラリティが二〇四〇年代だとすると、ポスト・シンギュラリティの人生のほうが長くなる。そうし

ています。反対派はこの状態を放置しておいてよいと考えているのでしょうか。現行の入試について、これまで改革案を提起されましたか？ 教育政策の最大のステークホルダーは保護者です。学校も塾も、保護者の望むことに応えざるをえません。多くの保護者が関心を向けるのは入試です。マニアックな知識の暗記に偏る入試を論理的思考力重視に変えることは決定的に重要です。

AIに負けない思考力を養う

今井 共通テストに記述式の問題を入れることにこだわっていますね。鈴木 現行の入試でも、東京大学や京都大学などの旧七帝大や、一橋大や東工大、筑波大などの二次試験、私学でも慶應義塾大学では本格的な記述式問題を課し、それは世界に誇れるクオリティです。しかし、本格

た時代を生きる彼らの土台を作るのが教育です。知識を覚えて吐き出す能力はAIに置き換わりません。AIが取って代わることでできない人間の能力の核心は、深い思考力・判断力・表現力と主体的で自発的な行動力だと思っています。

私には、センター入試対策を頑張る約五〇万人の高校生は、AIに取って代わられてしまう能力を身に付けるために、極めて大事な時間を費やしているように見えます。センター試験は国の独立行政法人が実施しているので、国が責任をもって改革するという事です。

共通試験に記述問題が必要なわけ

今井 共通試験を変更することによって高校の学びの方向を変えたいという方法は、本来の教育行政のあり方

的に記述を問う大学は限定されています。そこに向けて勉強している高校生は、最大に見積もっても全一年の約一〇〇万人のうちの五パーセント、五万人程度にすぎません。

人間は言葉を持つ動物であり、言語をベースにしてあらゆる思考を行っています。言語を獲得したことで抽象的な思考もできるようになった。だからこそ記述式問題に対応した学習を行って、思考力・判断力・表現力を育てるのです。実際、高校時代に読む、書く訓練を徹底してきた学生は大学に入ってから伸びています。しかし、この学習に打ち込む高校生を、すぐに一〇〇パーセントにすることは難しくても、せめて六割七割の高校生に思考力・判断力・表現力を育てる学習環境を作ること、喫緊の課題だと思います。

二十世紀の工業社会は、こうした

を逸脱していませんか。高校の学びを変えたいのなら、ヨーロッパ諸国のように、高校卒業資格試験を実施するべきではないでしょうか。

鈴木 例えば、学習指導要領には「言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあります。言語に関する能力を高めることは、豊かな心を育む上でも重要な意義をもっています」と書いてあります。一方で、SNSの登場・普及によって、若者の文章が単語の羅列になり、単語が絵文字になっていくような状態が起きています。現在の高校生や大学生の多くは文章が書けなくなり、コミュニケーション能力も落ちてきている。この現象が、中学生までおりてきていて、二〇一八年のOECDのPIISAでは、一旦、復活していた読解力が急速に低下しまし

た(二〇一二年四位から、二〇一八年一五位)。その原因は、自由記述の問題を苦手としていることです。私はゼミの学生と話をするために頻繁にSNSを使いますが、私たち大人の世界と、高校生や大学生たちの間のコミュニケーションとのすさまじい差を感じます。年ごとに劣化している。これを放っておくと思っても後退していくでしょう。

学習指導要領に言語活動の充実をいくら書いても、それだけではこの劣化は止められません。この目的を達成するために、あらゆる政策を駆使するのは国の責務です。確かに、入試改革によって高校生の学びの方向づけをするのは邪道かもしれない。しかし、すでに現行入試が、時代遅れの方向に向いてしまっている。入試に触れずして、実効ある改革ができる対象があるなら教えてほしいも

では独自に記述式の作問や採点態勢が組みません。共通テストに記述式の問題を入れなければ、浪人を含めて約五五万人の受験生のうち、四〇万人は、引き続き、検索すればわかる知識の習得のために青春を費やし続けることとなります。しかし、二つの変化によって学びが変わる一五万人だけではなく、残りの四〇万人もAIに取って代わられることなく職にありつけるようにしなければなりません。そのために共通テストを変え、現場を応援していこうということになりました。これが三つ目です。大学進学者は五〇万人ですが、五〇万人の通う高校の授業が変われば、就職する高校生の学びも変わり得ると考えました。

記述の採点に問題はないか？

今井 私も記述式の問題は大事だと

のです。

今井 受験生全員が受ける共通試験に記述式問題を課すのではなく、個々の大学が二次試験で行えばいいという意見はどう思いますか。

鈴木 これまで小論文などの記述式試験を重視してきたのは、旧七帝大や慶應大学などです。地方の国立大学の多くはセンター試験を重視してきました。私たちは五年前からこの現状について議論を始め、三つのことが動きました。一つは、国立大学協会が、地方を含むすべての国立大学の個別入試で記述式導入を決めたことです。地方の公立高校は、地方の国立大学の入試動向を注視し、また自校の国立合格者数を気にしているのです。これによって大きな変化もたらされます。

二つ目は、私立大学への記述式問題の導入。具体的には、早稲田大学

思いますし、本来の思考力、表現力を測ることができるならば導入すべきだと思います。ただ、短期間で採点できるのか、採点のぶれをなくすることができるとかという懸念が出るのは、無理もないことだと思います。鈴木 文科省は当初、十二月の年末に試験日の前倒しをすることを考えていたのですが、公立高校から反対されました。もしも入試が十二月二十五日や二十六日になっていけば、採点期間が延びていましたから、話はいまど変わってはいはずです。

また、民間企業の採点実施機関は、長年蓄積した採点ノウハウを駆使して、採点のぶれを減らすためにまずは三人で採点し、それをさらに三段階でチェックするという四層にしています。ただし、短期間で採点をやらなければならず、しかも大学教師が手伝ってくれるわけでも、フラン

の政治経済学部が、二〇二一年度より、独自試験として「日英両言語による長文を読み解いたうえで解答する形式とし、記述解答を含むこと」と「数学の必修化」を決めてくれました。都市圏の受験生は私立文系志望が非常に多い。私学の雄である早稲田大学の入試が変わることで、予備校での学びを含めて私学志望の学生の勉強が変わります。これも非常に大きな影響を与えます。この二つが進むので、一五万人くらいの学びが変わると期待しています。実は、私もこれでいいのかなと思った時期もありましたが、文部科学省の若手から、残りの高校生は見棄てていいのですかと怒られて、一〇〇%改心し、共通テストに記述式問題を入れることを全面的にサポートし始めました。

確かに、中堅・小規模の私立大学

スのように高校教師が行うわけでもないで、やむなく学生を一部入れざるをえなくなったようです。バイトという印象が悪いですが、実際は厳格な選抜をされ、訓練されます。ぶれが多い採点者はそもそも採点からはずされます。学生かどうかという属性ではなく、採点能力で判断するのが筋です。私も「学生？」と思ったのですが、聞いてみると、色をついた高校教師よりも、記述式を特訓してきた優秀な学生のほうが採点基準に忠実のようです。現に、直近の試行で一〇〇〇分の一までブレが減ってきていて、本番初回では、一万分の一から四くらいに減少する見通しもついていました。五教科で五〇〇点満点中、国語の記述式の配点は二〇点ですから、ブレの影響は二五万分の一から二五万分の四になります。しかし、ブレをゼロには

できないのが記述式の宿命です。現在行われている大学の論述問題の採点でもブレは出ます。

今井 しかし、学生でもブレなく採点できるといえるのは、業者の言い分ではないのでしょうか？ もちろん業者はそう言うと思いますが、それだけでは世間は納得しません。そこをきちんと押さえることなしには、

今の先生の発言は空論に聞こえてしまいます。また、最初から完璧にできなくても、やりながら修正すればよいという考えには賛成しますが、採点のブレないように字数を制限し、書き出しも制限するというような形式では記述式にする意味はなく、得点を稼げる書き方のテクニックを機械的に適用するだけになってしまい、弊害の方が多いと思います。

鈴木 この国では、新提案が出てくると、問題点を徹底的に洗い、それが可能だったでしょう。

今井 六つの民間試験のどれを選んだらいいのかわからないというのと、公平に点数が変換できるのかという懸念が大きいのでは。

鈴木 本当に大きいですか。各大学が、それぞれ、どういう英語力を身に付けて入学してきてほしいかを明らかにし、どの民間試験のどのレベルが必要かを指定し、必要ならば追加事項を明示すればいい。さらに、大学入試センターから送られてくる英語検定の結果をどう使うか、どれくらい重視するか、の裁量権はそれぞれの大学にあるわけで、足りない部分は二次試験で実施すればいいのです。今回、各大学の方針決定と発表が遅れたこと、それを文部科学省が早めに調整しなかったことが、最大の問題であったと思います。高校の不安もそこでした。それさえクリア

を極力ゼロにしようとするところまではいいのですが、結局、完璧にならないと導入中止となり、現在の問題はそのまま放置されることがよくあります。今回も、そうなりませんでした。八割の若者の未来を犠牲にしても、二五万分の一から四の採点のブレは容認しないということです。

英語民間試験を導入する意義

今井 英語の民間試験を六団体から選ばなければいけないということが、混乱の原因の一つになっています。国内の民間試験は大きな教育産業ですから、いろいろな弊害もある。例えばTOEFLのような国外のものに決めるとかはできませんか。

鈴木 TOEFLとIELTSが全国で実施してくれるならいいと思いますが、現実には難しいでしょう。

できていれば、実施可能だったと思いますが、この問題が、政争の具と化してしまいましたので、冷静な改善の議論は無理になってしまいました。

欧米の大学ではTOEFLとIELTSを活用して、もう何十年にもなります。実績もあるし、利用者からの膨大なフィードバックを経て、毎年改善されている。日本でも私が文科副大臣の時に秋田の国際教養大学がTOEFLを活用し始め、「これはいい」と通達を出したら、三割の大学が導入してすでに一〇年ほど使っています。東京大学の大学院も、留学生試験でも使っています。

むしろ、今のままだと、都会の生徒や裕福な生徒は民間試験をいくらでも活用できるが、地方の生徒は活用しづらい。そこで、国が音頭をとることで、会場を全国津々浦々に一

検定料が高いし、島嶼や中山間地域ではやれませんが、高校生の水準に合わせたものを別に作ってはくれません。一方で、官製で四技能の共通テストを作っても、CEFR(外国語の運用能力を同一基準で測ることができる国際標準)に乗っていないければ海外受験では使えず、国内でしか通用しないものになってしまいます。英検、GTECを含めて多くの会社の試験を受けられたほうが、会場や日程面で機会が増えるかと判断したのだと思います。

今井 検定料は、国が補助すればいいのではないですか。

鈴木 経済的に困難な生徒に限れば、そうした措置をとる決断もできたと思います。今までは、独立行政法人大学入試センターの試験には、一円の税金も入っておらず、すべて受験料で賄ってききましたが、世論が許せ

挙に増やし、経済格差が生じないよう料金体系も是正し、受験回数も制限をかけて、希望する大学に生徒の民間試験の成績を一元的に提供するシステムを作ろうとしたわけですが、政争の前に、潰れてしまいました。

文部科学省の対応が後手に回ったことは事実です。この一年何をやってきたのかと正直思います。実際には、試験会場もセンター入試に比べて、二七ヵ所も増えています。それが十分伝わっていない。有料での高校教員の試験監督への活用も、地方の高校教員はやる気でしたから、反対する全国高校長協会らを説得すべきでした。よかれと思って、言い分を聞きすぎたことが裏目に出ました。

この国では、ベストとはいわれないけれども、ベターなもので少しずつ

改善し続けていく方法が通用しない。この国では、今ある問題の放置には甘く、新しいものには無謬性を要求する。なぜイノベーションができないかを改めて確認できました。

もし改革が延期されたら

今井 今回、共通テストで導入予定だった英語の民間試験と国語・数学の記述式問題が延期されることになりました。今後の展望は？

鈴木 延期によって、共通テストが、それ向けの勉強に注力している高校生の学びを歪め続ける実態は変わらず、改革の好影響は、共通テストの比重が元々低いトップ層に限定されるところだと思います。

私は、全国一斉に同一問題を同日に解く共通テストの方式自体、廃止すべきだと思っていますが、今回の

ことで、もう文科省は抜本的な改革はできないでしょう。いわんや政治も主導できない。となると、個別の首長、教育長、校長・教員、NPO、民間、保護者など、情熱ある人々と改革を進めていくしかない。私の周りには、中央には任せられない、でも目の前の子どもたちだけは救ってほしいと頑張っている人たちも大勢います。この動きを地道に増やすすかない。学校間、地域間で差が広がってしましますが、それはもう仕方がないのかもしれない。

今井 そもそも日本の教育はトップダウンでコントロールしようとしてきているので、それはむしろ望ましいことではないでしょうか。今回の入試改革は、受験生、保護者、教育現場の懸念に丁寧に対応せず、細かいところは民間業者任せで押し切ろうとしたことから頓挫しました。私

は反対派の人々が言う、「入試改革は高校に失礼だ、入試の有無にかかわらず、高校は意義のある内容を教えるし、高校生は進んで学習する」という主張は理想論で現実とかけ離れていると思います。

しかし、改革実施に向けたこれまでの年月は、日本の教育を主体的な学びに向けて大きく前進させたと思います。学習指導要領を変えるだけでは「主体的な学び」の価値は今ほど定着しなかったと思います。なので、もう日本では改革はできない、と悲観するよりも、せっかく実りかけてきた「主体的な学び」をこれからのように大きな果実にしていくかが、国、地方の教育委員会、学校をはじめ、社会全体の課題になると思います。

構成◎戸矢晃一

現場を惑わす曖昧な改変は止めよ

特集◎——入試大混乱

東京大学名誉教授

南風原朝和

聞き手◎今井むつみ 慶應義塾大学教授

「暗記」だけの試験だったか

今井 今回の大学入試改革は、英語の民間試験導入と、国語・数学の記述式問題の導入について、「待った」がかかりました。私は、改革推進派の意見にも、反対派の意見にも傾けるところがあると思いますが、両者の主張はすれちがっているようにも見えます。推進派の人たちは教育改革の理念を浸透させるために入試改

はえばらともかず

1953年沖縄県生まれ。77年東京大学教育学部卒業。81年米アイオワ大学大学院教育学研究科教育心理・測定・統計学専攻博士課程修了(Ph.D.)。専門は心理統計学、テスト理論。東京大学理事・副学長等を経て、同大学高大接続研究開発センター長、大学院教育学研究科教授。2019年より広尾学園中学・高等学校長。日本テスト学会副理事長も務める。著書に『心理統計学の基礎』、共著に『教育心理学』、編著に『検証 迷走する英語入試』など。



革を実施したい、反対派の人たちはひたすら実施上の問題のことを批判しているようです。

南風原 私は、今回の一連の改革を進めようとしている方々の理念について、その中の言葉の使われ方、意味に違和感があります。例えば、「現状の大学入学者選抜は、知識の暗記・再生の評価に偏りがち」だから、改革すると言われます。ここで「知識」は「暗記」し「再生」されるものと単純に捉えられています。しかし、実際には知識は個人の中でダイナミックに更新・再構成されるもので、知識を使って思考するプロセスを経て、より深い理解を伴う知識が構成されていきます。つまり、知識と思考は双方向的な関係にあるはずです。

しかし「表現力」は表現する「技能」ですから、一つのグループに入れるのが自然でしょう。また、「思考力・判断力」などと限定することで、「読解力」などの大切な能力が見落とされがちになります。さらに、「思考力・判断力」と言われても、現場にいる教師や生徒には捉えようがありません。「あなたは思考力のテストで平均以下でした」とか、「判断力がやや劣る」と言われた生徒は、「すみません」と謝るしかない。「あなたのクラスの子は思考力が他のクラスよりも低い。判断力がよその学校よりも劣ります」と言われた教師は、それらの力をどう伸ばしているのかわからないし、どう評価しているのかもわからない。そうではなく、「植物の成長についての理解が十分でない」「天体における地球の動きについての理解が十

識」になります。死んだ知識とは、頭にあってもただ溜め込んでいるだけで使うことができない知識。生きた知識とは、知識が断片でなく体系の中に位置づけられ、他の知識と接続されているものです。思考力は生きた知識と不可分です。

南風原 私もそう思います。最近はやりのテレビ番組で、東大生が登場するクイズ番組がありますが、そこで試されているのは一見すると、ただの断片的、表面的な知識です。しかし、参加している大学生はその内容をわかりやすく説明できるし、いろいろなこととの関係付けもできています。つまり、深い知識、高いレベルの知識になっているわけです。そのような「断片のように思われる知識でもそこにある共通した原理がわかる、あるいは相互に関連付けられる知識」は、「偏重」される価値

分でない」「歴史のここのつながりがわかっていない」と言えば、もっとよく考えたり、人に聞いたり、本で調べたり、話し合ったりすることで理解を深めることができます。「思考の結果として理解が深まる。そのような深く統合された理解を目標にする」と言えば、現場は意味がわかり、納得します。そこをきちっと詰めて、曖昧な表現のまま現場に下ろし、そのために現場が混乱しているのが現状です。

この点は、テスト理論の観点からも問題だと思っています。思考力を中心に評価しようとしても「思考力」という構成概念の定義がはっきりしなければ、具体的に何ができる人なら高得点がとれ、何ができないと点数が低くなるテストなのかわからない。それではテストはできません。

値のある大事なものです。「知識偏重からの脱却」を主張される方々には、「知識」というものの意味について、見直していただく必要があると思います。

今井 私は、推進派の方々には、死んだ知識を生きた知識にしなければならぬと考えているのだと思います。それには賛同しますが、南風原さんを含めた反対派の人たちに、知識が思考と対立しているように読めてしまうのは問題だと思っています。

何を測るのがはつきりしない

南風原 二〇二〇年度から実施される予定の大学入学共通テスト（以下、共通テスト）では、学力を三つの要素「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性等」に分け、そのうちの「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するとしています。

今井 テストができないとは、具体的にどういったことでしょうか。

南風原 例えば、先にお話ししたように、知識と思考は双方向的な関係にあるのに、思考力を知識とは別のものと考えて妥当ではない定義をしてしまうと、テスト内容があらゆる方向に行ってしまう。

また、五〇分の試験時間で二〇〜三〇の設問があるとしたら、一問につき二分前後で答えなければなりません。その短い時間内で高速で働く思考力を測ろうとしているのか、さらにそれが大事なのか、ということも問い直さなければなりません。思考には、何日もずっと考え続けるよりやくわかる、というようなこともあります。どちらが大切かと言えば、質の高い知識をクリエイトしていくには、後者の持続する思考のほうが大切ではないでしょうか。

いわゆる頭の回転の速さでパッと見て解けるといっても一つの能力ですが、それを測ろうとするとクイズのようなものになりやすい。思考の時間的なスパンについても改めて考える必要があると思います。

今井 私は「思考力」を測ることが大事と主張し、改革を推進してきた安西祐一郎さんや鈴木寛さんの意図をわかっているつもりですが、その主旨は、思考力を知識と切り離し、知能テストのように思考力を測ろうとしているのではなく、文章の読み取りの中で、情報を統合し、推論する力を測ろうとしているのです。また、教育でその力をつける必要があると訴えられているのです。それを知識と思考力を別ものに扱っているから、理念も曖昧というのは、教育改革、入試改革の理念を理解してのご批判とは思えません。

いで作られた問題は記述式の本来の良さを弱めてしまい、もはや記述式とは呼べない設問になったにもかかわらず、採点のぶれは消えない、という事態になってしまいました。

奇妙な「条件付記述式」

今井 採点がぶれないことはそのままで大切でしょうか。慶應義塾大学SFCの入試では長文の小論文を課しています。採点の指針はありますが、基本的に採点する教員の裁量に任せられています。

南風原 約五〇万人が受験する共通テストとの違いは、まさにそこです。受験生が受けたい大学の教授が出題し、その人たちが採点して評価するのなら文句の言いようがない。もちろん、同じ人が統一して採点するなどの工夫をしながら、ぶれを少なくする努力をしていると思います。そ

南風原 私が参加した高大接続システム改革会議の議論でも、また学習指導要領として学校現場に下りてきている文書でも、知識や思考力などの言葉が曖昧なまま用いられていて、そのために理念と言われているものも曖昧になってしまっているというのが私の認識です。

今井 共通テストで記述式の問いを設けることが見送られましたが、記述式についてはどう思われますか。
南風原 表現力は思考のためにも必要ですし、表現すること自体も大切です。その意味で、書く力を育て、評価することはとても大切だと思います。ただ、共通テストの記述式については、約五〇万人が受験するという点がポイントです。記述式の導入は文部科学省の会議で決められたので、文科省はなんとか実現しようとしてきました。その際に文科

して、想定外の答案がでてきたら採点基準を見直すなど時間を掛けて柔軟に対応しています。それができるから記述式の試験は成り立っている。しかし、五〇万人の受験生の解答を短時間で採点するとしたら、それはできません。

今井 その通りだとは思いますが、例えば、フィンランドでは高校の卒業資格試験では、一教科の試験に六時間をかけ、ほとんどが記述式です。人口五百数十万人の小さい国だからできるのだとは思いますが。しかし、本当に大学に進学する資質を問うのであれば、そのくらいのができないものか、とも思います。

南風原 私は「採点者によるぶれがあるからやめよう」と言っているのではなく、記述は大事なものである、記述式問題を通して、受験生へ記述することの大切さを伝えるメッセージ

省が一番恐れたのは、採点にぶれが出ることです。同じ答案なのに採点者によって差が出たり、自己採点と一致しないといったことが事後にわかると大きな問題になりますから、同等の答案には同等の点数がつくようにすることに苦勞した。

その結果考え出したのが、書きだしや文末などに条件を付けて三〇〇〜二二〇字の短文で答えさせる「条件付記述式」というものです。論旨が明快な日本語になっているか、論理的に整合的かどうかは問われず、特定の言葉が含まれているかという観点で採点されるので、型にはまった解答を促すことになりかねません。

しかも、試行調査(プレテスト)を行った結果、条件付記述式であっても、自己採点との不一致が約三割残ることが明らかになりました。結局、採点がぶれないようにという狙

ジにもなると思っています。ただ、記述式の良さ——深い理解や表現を本当に問うためには受験者数の限界がある。だから記述式は大学ごとに二次試験で行えばいいのです。

今井 東京大学、京都大学などは二次試験に記述式があり、慶應の入試にも記述式があります。しかし、入試に記述式を課す大学は限定的で、そのために高校で記述式の勉強をせざるにしているのはよくないから、共通テストに導入すべきだという意見もあります。

南風原 かつて、「国立大学で記述式問題を課しているのは四割だけ。残り六割は文章を書かずに入学している」と公言した方がいましたが、まったく間違っています。正確には、二次試験で国語の記述式問題や小論文を課しているのは、国立大学の募集人員のうち約四割だということ

池谷イサオ

あ、お前さん、どっかへ行くの？
だ、だよ。

後輩に私を任せよう。
お、お、お。

お、お、お。
お、お、お。

お、お、お。
お、お、お。

NEO CEDAR 312円
ケムリを吸う。ノドの薬。 (四四四四四四)

すっかり指導する必要があります。したがって、例えば英語のスピーキング試験の導入についても、学習指導要領にあるから大学入試にも必要だというのはなく、学習指導要領にあるからにはまず高校の授業でしっかりとやるべきだということですね。

中学生も高校生も自分が英語を話せたらいいなと思っていて、保護者もそれを望んでいる。だったら、英語が話せるように授業にどう組み入れていくかを考える。そのうえで、大学入試でも問う必要があれば、適

切な設問を作ればよい。入試を変えても変えなくても、大学に行っても行かなくても、高校でやるべきことはやらなければいけません。

その一方で、大学にも問題があります。大学は助成金でコントロールされていて、文科省から「思考力・判断力・表現力で試験をしろ、四技能試験を活用しろ」と言われたら、断りにくい状況になっています。これまででない悪い状況です。大学には「もっと主体性を持つべし」、国には「学問的自由を尊重して」と言いたいですね。

ネオシーダー

タバコを吸う人のための薬です。ぜひお試しください。

- 効用・効果：せき・たん
- 用法：先陣に点火し、たばこのように煙を吸入する。
- 用量：1回1〜2本、1日量10本まで。

この医薬品は、医師・歯科医師・薬剤師・登録販売者にご相談のうえ、[使用上の注意]をよく読んでお使いください。

【してはいけないこと】①次の人は使用しないこと。②喫煙習慣のない人・未成年の人③本剤を使用している間は、次の医薬品を使用しないこと。④鎮痛補助剤 麻酔中に、ニコチンとタバコを同時に含む。使用上の注意を守ってご使用ください。⑤煙草類は必ずしも使用しないでください。⑥火気の使用を禁止された所、および禁煙の場所で使用しないでください。⑦全国の薬局・薬店で販売しています。

販売店：販売元・お問い合わせは (株) アンダー本舗 〒275-0024千葉県習志野市藤浜3-2-1

TEL.0120-892-115

改革のきつかけを振り返れ

今井 マークシートの試験を続けるのはいいとしても、私は記述式の設問も必要だと思えますが、共通テストはこれからも現在のマークシート型しかないとお考えですか。

南風原 そうですね。ただし、マークシート型の問題の内容で、見直すところは見直したほうがいい。

共通テストに記述式を、というのは途中から出てきた話で、そもそもなぜ入試改革が必要かということについて、関係者の間で必ずしも認識

す。残り六割は、理工系などの学部で、国語の記述式問題はないが、数学や理科など、それぞれの専門に関する試験では記述式問題を課しています。東北大学の調査によれば、国立大学の入試問題の九割くらいが記述式問題で、選択式のほうが珍しいくらいです。

今井 しかし、私立の大学ではセンター入試の得点だけで入学できるところもあります。東大をはじめとしたいわゆるエリート国公立の話だけで、二次ですべて記述式をやっているから共通テストでは必要ない、というのも偏った見方のように思えます。

南風原 記述式試験を自分の大学で実施するのは無理なので、共通テストでやってほしいという大学もあると思います。しかし、先にお話ししたように、共通テストの規模には、

記述式試験はなじみません。学校教育と入試は分けて考える

今井 高校の授業は、大学入試を見て動いているから、高校の授業の質を上げるには大学入試を変えなければならぬ。共通テストに記述式を導入するのは、高校の教育現場を変えるためだという意見もあります。

南風原 今取り入れようとしている記述式の設問は、それに向けて努力するに値しない内容です。その採点に何十億円もかけるより、高校でもっとしっかりした記述の評価をやったほうがいい。高校の規模であれば十分に丁寧な評価、そして指導ができます。

また、「入試に取り入れられないと高校の現場が変わらない」というのは高校の先生方に失礼だと思います。小学校、中学までは非常に立派な教

育がされているのに、高校では悪い大学入試に引きずられた授業が行われているという言い方がされたりしますが、私の実感ではそんなことはありません。

入試が変わることで教育が変わる部分もあるかもしれませんが、ヘンに変わってしまう部分もある。だから、まずは大学に進学しない約五割の人を含めた教育をしっかりと見直すことが大切であり、そこにまず優先的に投資すべきです。入試を変えれば、というのは逆ではないでしょうか。

私は高校の学習指導要領に書いてあることを網羅するのが大学入試ではなく、入試は大学で学ぶためには何が必要かという観点で考えなければならぬと考えています。一方、指導要領で重視していることは、大学に進学するかしないかに関係なく、

が共有されていないと思います。解くべき問題が共有されていけばいろいろな解法が並べられますし、評価もできます。しかし、何を解こうとしているのか、何が問題なのか共有できていません。「反対するならば、対案を出せ」という声もありますが、共有している問題について出てきた解法に対して対案を出すことはできませんが、そこははっきりしていません。

今回の一連の改革のきっかけの一つは、センター試験の科目数などが肥大化してきたことです。「共通テストをスリムに」という点は、ほとんどの教育関係者の一致した問題意識だと思います。もう一つは、AO入試を広げてきた結果、学力不問の選抜が生じたことだと思います。これも現状でよいと言う人はいません。多くの教育関係者が共有している

と思います。非営利で国際的にも使われるTOEFLに絞るのはどうでしょうか。

南風原 そうですね。TOEFL以外でも海外の試験は国際的にも定評があります。もちろん日本の試験も学校教育でそれらを検定的な目的で利用することには意味があると考えています。しかし、それらを共通テストとして使うとなると、まったく別問題です。

また、例えば英語のスピーキングを、日本史を学ぶ者にも体育を学ぶ者にも、全員に課するのは大きな飛躍

この二つの問題に、新しい共通テストはどう答えたのか。大学入試センターの運営はこれまでほぼ受験料だけで賄ってきたのに、多額の税金を投入して記述式を導入し、ますます肥大化させようとしていました。AO入試に関してはほとんど手つかずのままです。

これまで、センター試験が終わると、翌日には問題が解答も含めて新聞に掲載されてきました。それを見て、たくさんの方が問題を解いてみる。そうした人々の批判に耐えられない問題を作り、採点をしてきました。さらに、点検や評価を重ねて翌年の試験に反映させてきました。こうした実績をきちんと検証することもせず、「センター試験を止めて〇〇テストを」と変えてしまっているのでしょうか。

今井 国語の記述式だけでなく、英語です。

現在のセンター試験でもすべての科目が必須ではなく、大学によって選んでいるわけですから、すぐに必須と考えず、大学によって個別に指定する、あるいは二次試験の中で評価する方法もあると思います。今井 今後の立て直し方についてはどうお考えですか。

南風原 萩生田光一文科大臣のコメントを聞く限りでは、ちょっとした配慮が足りなかったくらいに考えておられるように感じます。例えば、会場の確保を民間事業者任せたか

語の入試問題にもスピーキングはともかく、英作文は少なくとも必要だと思えます。リーディングに必要な知識と作文で求められる知識とでは大きな隔たりがあるからです。英語に六団体の民間試験を導入するとされる際の比較が難しく、検定料や試験会場の点でも、フェアでないなどの理由から見送られました。それならば民間試験を一つにしほって、受験料に補助金を出すことはできないのでしょうか。

南風原 一つにすれば今の問題の何割かは解決します。採点の質を考えた時にも、高品質な試験に絞れば、現時点でのベストの試験になるでしょう。ただ、一つのテストに絞る場合にはどれにするかが重要です。

今井 ベネッセなどの営利企業が参入することに抵抗感を持つ人はいる

らでできなかったが、国がやっていれできたみたいなきっかけに考えているのかもしれない。それでは同じ失敗を繰り返すと思います。

私は、各大学・各学部で学ぼう入試で評価することがどれだけ必要なのかということ、大学でこれらの力をどう伸ばしていくかということと併せて検討することが出発点ではないかと考えています。本来、そこからスタートすべきだったのです。

構成●戸矢晃一

司法通訳人という仕事

—知られざる現場

小林裕子著 外国人犯罪事件に必須の存在である司法通訳。現状の制度には何が欠けているのか？ 要通訳事件関係者、司法通訳を志す人必読の一冊。

◎1800円

学書 大叢 塾研 義学 慶法

中国 統治のジレンマ

—中央・地方関係の変容と未完の再集権

磯部靖著 なぜ習近平政権は「再分権」を進めるのか？ 一九九〇年代半ば以降の再集権、そして近年推進される「再分権」の検証とともに中央・地方関係の構造を明らかにする試み。

◎5200円

慶應義塾大学出版会

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30
☎03-3451-3584/Fax03-3451-3122
http://www.keio-up.co.jp/ (国保税別)

対談を終えて

教育改革・入試改革の展望

「主体的な学び」を戻すほみにはならない

慶應義塾大学教授

今井むつみ

教育・入試改革をデザイン・推進してきた鈴木氏と入試改革実施に反対する南風原氏の二人と対談する機会をいただいた。AI時代に生き残る人材を育てるために、深く思考し、それを言語で的確に表現する能力を身に付けさせる。鈴木氏にとって、

入試改革はその理念を全国の学校現場、特に高校に浸透させるための切り札であった。思考力、言語表現力を付けるためには、それを入試に組み込まなければならない。大学・学部ごとの二次試験では、良質の作問をすることが難しい大学も多くあるので、もっとも多くの受験生が受験

する共通テストに記述式問題を含める必要がある。共通テストは、短時間に採点結果を公表しなければならぬが、採点を高校・大学の教員に頼むことはできないので、民間業者委託しか選択肢がなかったというのが鈴木氏の論理だ。

対して南風原氏は、実施上の制約の中で、国語・数学に関しては理念を反映する記述式問題ができないこと、英語民間試験に関しては、六つの試験の間の相互比較の公平性、採点のブレなどの懸念から新入試実施に反対する。

南風原氏をはじめとした新入試実

もそも「記述式」では不十分で、

「論述試験」にするべきなのだ。

例えば、フィンランドの入試問題

(実際には高校卒業資格試験)の国語では「政治家やスポーツ選手などの著名人が、社会的に不適切な言動を行って謝罪をすることがある。『謝罪』とは何か、それを社会として、あるいは個人として受け入れるということはどういう意味を持つのかを議論せよ」という問題が過去に出題されている。分析力、論理構成力、表現力を問うと同時に社会科の倫理の問題でもある。歴史の視点が論点に入ればなお良い。かたや、センター試験で高得点を取りながら(センター試験得点を必要としない)慶應SFCに入学した学生たちは、センター試験は深く理解しなくてもテクニクで高得点が取れた、有名私大でもセンター得点だけで入学できるオプションがあることが大きな問題だ

と自らの受験経験を振り返っていた。

二人とお話を伺って、学びと教育

にとって最も本質的な視点が、独特な「日本型入試」の慣習のために曇

らされている気がした。二人とも、受験生だけでなく、高校教育全体の

ことを考え、教育改革・入試改革をするべきだと発言している。しかし、それならなぜここまでセンター試験に拘泥するのだろうか？ センター

試験自体が必要なのかを聞いた時、南風原氏は、センター試験は足切り

としては粒ぞろいの良問であり、深い思考力、表現力は二次試験で見ればよいと答えた。しかし、それなら

トップ国立大だけではなく、すべての大学で、二次試験で論述を課すこ

とこそを文部科学省は「指導」するべきなのではないか。一方、鈴木氏は、一部の中小私立大学で自前で記述試験を作問し、採点する体力がな

いと言う。ならば、すべての大学で

施反対派から出される懸念は、私自身も納得できるし、英語民間試験導入と国語・数学の記述式問題導入の延期は支持する。しかし、入試改革の背後にある教育改革の理念は、学習科学の観点からは高く評価できる。そもそも、自分で考えを論理的に表出し、他者に説明できるレベルと、選択肢の中から選ぶことができるというレベルでは知識の質に大きな隔たりがある。暗記しただけで後に使えない知識(「死んだ知識」)をため込んで試験の時に排出し、後は忘れてしまうという教育から脱却しなければならぬという理念は今回の導入延期でリセットされてしまっただけではない。これからの社会で活躍し、幸せに生きるためには、情報を選び、組み合わせ、推論をするという思考能力が不可欠だ。その思考力を大学で専門教育を受ける資質として測ることも当然のことだ。そ

記述試験が実施できるような支援こ

そを文科省はするべきではないか。

センター試験を、トップ国立大の二次試験足切りの道具や、体力がない大学が自前入試を実施できないことの言い訳の道具にしてはいけない。

高校教育そのものの質の向上を目指すためには、大学入試ではなく、ヨーロッパ諸国で行われている高校卒業資格試験を実施するべきなの

はないだろうか。なにより、高校で本来の意味での「主体的で深い学

び」が実現できるよう、自治体、高校、教員が様々な工夫ができるよう

な支援と仕組みづくりをすることこそ、文科省の役割ではないだろうか。

実際、高校入試では、都府県レベルで深い思考力を問うための独自の取り組みが始まっている。このような

取り組みでよいものを参考にしながら、国レベルの入試制度を作ってい